

乳腺悪性葉状腫瘍（にゅうせんあくせいようじょうしゅよう）

乳腺悪性葉状腫瘍とは

乳腺悪性葉状腫瘍は乳房に発生する比較的まれな悪性腫瘍の1つで、一般的な乳房の悪性腫瘍である「乳癌」が乳腺の上皮成分から発生するのに対して、「葉状腫瘍」は上皮成分に加えて間質成分を由来として混ざり合い発生する腫瘍です。間質細胞の増殖の程度や顔つきの悪さの程度によって良性、境界悪性、悪性に分類されます。悪性葉状腫瘍になると遠隔転移をきたすことがあり、そのような腫瘍は上皮成分が乏しく肉腫に似た組織像を呈することがあります。

臨床的特徴

好発年齢は35-55歳代の閉経前の女性に多く見られます。葉状腫瘍は乳房にできる腫瘍全体の0.3-1.0%を占め、そのなかでも20-25%程度が悪性葉状腫瘍であると報告されています。局所再発をきたしやすく、初発時は良性葉状腫瘍であっても局所再発に伴い悪性転化することもあります。腫瘍の大きさはさまざまですが、数cmから20cmを超えるものまであり、悪性葉状腫瘍では急速な増大をきたすことが多いです。

組織学的特徴

葉状構造を示す特徴的な組織像をもつことから「葉状腫瘍」と名付けられています。良性の線維腺腫との鑑別が難しく腫瘍の一部のみを観察する針生検のみでは診断に至らないこともあります。予後に影響する因子として腫瘍の大きさや組織学的な悪性度、間質の過剰増殖の程度を参考とします。

症状について

乳房内の痛みを伴わない腫瘍として自覚されることが多いですが、急速増大に伴って痛みが出現することがあります。皮膚の変化（発赤や潰瘍形成）、乳房の変形を伴うことがあります。

診断について

画像検査としてはマンモグラフィや乳房超音波検査、造影MRI、CTなどを用います。組織診断を行うためには針生検が必要となりますが、生検のみでは全体像の評価が困難なため正確な診断に至らないこともあります。したがって増大傾向を示す腫瘍については外科的な切除を行うことも多く、手術後に診断が確定することもあります。

治療について

葉状腫瘍の治療の基本は手術による切除です。腫瘍が露出しないよう十分に距離を取り、腫瘍の大きさに応じて乳房部分切除術や乳房切除術を選択します。一般的な乳癌では術後に化学療法（抗がん剤）、ホルモン剤などの薬物療法が行われることが多いですが、葉状腫瘍に対しては有用性が示された術後薬物療法はありません。遠隔転移や切除不能な局所再発をきたした場合には化学療法を検討しますが、悪性葉状腫瘍を対象として最も適した薬剤の種類や投与方法については確立したものではありません。悪性軟部腫瘍（軟部肉腫）に準じてドキソルビシン、イホスファミドなどの化学療法が治療薬の候補となります。

執筆者

- 氏名： 岩瀬まどか（いわせまどか）
- 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
- 診療科： 乳腺・内分泌外科